

アイヌ文化保全と堆砂問題への解決のために、平取ダム建設を中止して 河川改修による額平川の治水を求める（素案）

（一般社団）北海道自然保護協会 会長 佐藤謙
十勝自然保護協会 共同代表 安藤御史・佐藤与志松・松田まゆみ
富川北一丁目沙流川被害者の会 代表 中村正晴
平取ダム建設問題協議会 代表 松井和男
苫小牧の自然を守る会 代表 館崎やよい
胆振日高高校退職教職員会の会 代表 高橋 守
自然林再生ネットワーク 代表 前田菜穂子 ①

平取ダム堤体の入札が行われていますが、私たちはあらためて平取ダム建設の中止を求めます。平取ダム建設は、国交省主導の地方自治体首長を構成員とする検討の場で決定されました。これらの首長はすべてダム建設推進の方々なので、ダム建設の検証の場ではなかったことは明らかです。私たちは節目ごとに室蘭開発建設部に対して、要望や質問を行ってきましたが、残念ながら誠意ある回答をいただけませんでした。

私たちは、現在と後世の人たちに失ってはならない財産を残していくために、平取ダム建設を中止して額平川の河川改修による治水を求めます。

1997年に二風谷ダムが完成後、16年後の2012年に二風谷ダムの半分以上が土砂で埋まりました。その影響は、下流のシシャモ不漁だけでなく海岸線が200mも後退した撃手に泥化して、ホッキ貝も獲れなくなりました。さらに、下流では土砂供給がなくなったため沙流川の河床が下がって、その結果地下水位の降下に伴い井戸水が不足する事態も招いています（以上は、7月11～16日北海道新聞記事）。沙流川流域に悪影響を与えている二風谷ダムに加えて、北海道開発局は二風谷ダム上流にさらに平取ダムの建設を進めています。二風谷ダムの実態と平取ダム建設の問題点および解決策を示します。

1. アイヌ文化の保全

アイヌ文化保全については、①1997年の二風谷ダム裁判判決で、「国はアイヌ民族の文化享有権などの価値を考慮せずにダム建設を進めたこと」は違法としました。②1997年のアイヌ文化振興法には「この法律は、・・・アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り、・・・を目的としている」と記述されています。③「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議案」（2008年、国会決議）において、「全ての先住民族が、名誉と尊厳を保持し、その文化と誇りを次世代に継承していくことは、国際社会の潮流であり、また、こうした国際的な価値観を共有することは、我が国が二十一世紀の国際社会をリードしていくためにも不可欠である。」と述べています。このように、国際的はもとより国内的にも、アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現が求められています。

しかし、平取ダム建設においてアイヌ民族の誇りは尊重されたのでしょうか。平取ダム

建設についてのパブリックコメントにおいて、住民からアイヌ文化に関する寄せられた意見のいくつかを紹介すると、以下のようなものでした。(1)アイヌにとって大切なチノミシリを水没することは許されません、(2)他の方法で治水、利水すべきです、(3)台風10号のときを参考に弱かった堤防を強化してください、(4)お金がかかっても治水は他の方法でできるのですから、他の方法で行うべきです、(5)チノミシリを水没することは二風谷ダム裁判の判決から逸脱しています。

私たちは、このようなアイヌの人たちの見解を重視すべであると開発局に申し入れましたが、2013年9月の開発局の回答は、「平取ダムにあたっては、アイヌの文化的所産に与える影響について調査し、アイヌ文化継承に資する必要な措置を行なうこととしています。」というものであり、あいまいなままに終始しました。この問題について具体的に示されたのは、2014年9月に入って、チノミシリ（我ら祈る場所）やカムイワツカ（神の水：湧水）はダム湖に沈み、ダム湖の水が少ないときに訪問が可能という案でした。北海道開発局は、チノミシリを水没させる計画ですので、これでは、アイヌ文化振興法の「アイヌの人々の民族としての誇りが尊重される社会の実現を図り」の法の精神は無視されたのも同然です。

平取ダムの検証を行った検討の場の検討は、国交省の「中間とりまとめ」に沿って評価を行われなければなりません。ダム案か非ダム案かを評価する基準として最重要視されているのがコストです。その結果、たいていの場合ダム案が、コストが最低ということで採用されています。この評価基準には、(アイヌ)文化を評価する項目がありません。国交省は、ダムによる文化の破壊を想定していなかったため、改めてアイヌ文化の価値を考慮したダム建設の考えを示すべきで、それがなくまま平取ダム建設を強行することは許されません。

2. 二風谷ダムと平取ダムの堆砂問題

2.1 二風谷ダムの堆砂

二風谷ダムは、建設当時の窪地が見つかったことによって堆砂容量は従来の1430万 m^3 ではなく、1910万 m^3 であるという。ダムの堆砂が急激に進行してきたために、このような言い訳をする北海道開発局は恥ずかしくないのでしょうか。ダム建設から16年経った2012年の堆砂量1667万 m^3 は、総貯水量：3150万 m^3 の53%を占めます。当初の堆砂容量は550万 m^3 であり、その後1430万 m^3 に変更し、さらに現在は1910万 m^3 と堆砂容量がくるくる変更になるダムは日本では稀有です。このような急激な堆砂の増大によって二風谷ダムの治水能力は減少していきます。しかし、開発局は、100年後でも堆砂量は1910万 m^3 以内に収まると述べています。堆砂容量1910万 m^3 のうち、15年間（100年間の15%）で1667万 m^3 （堆砂容量の87%）堆積したのに、残り85年間で243万 m^3 （堆砂容量の13%）しか堆積しないというのは常識的に考えられません。そうこうしているうちに、二風谷ダムの治水能力は減少するばかりで、さらに二風谷上流の額平川合流点付近では沙流川も額平川も河床が上昇していて、洪水の危険が増えています。今必要なのは、二風谷ダムの堆砂を減らすことであり、そのために効果的なのは、堤防強化などの治水対策と並行して二風谷ダムの堤体を取り除くことを決断することです。

二風谷ダムについて、清原らは、二風谷ダムは河川流入部近くに堆砂デルタ地形が生

じる傾斜堆砂を形成していて、排砂施設による傾斜堆砂の維持が必要と述べています。排砂施設について具体的に述べていませんが、オリフィスゲートと考えられます。検証する検討会最終報告書で二風谷ダム堆砂はこれ以上進行しないと述べているのは、このような考えに基づいている可能性があります。実際にはこの報文に記載されているように傾斜堆砂を維持できず、堆砂は進行しています。清原らは、排砂施設で傾斜堆砂を維持できない場合は、維持掘削による傾斜堆砂の維持が必要と述べています。二風谷ダムはこれに相当すると考えられますが、開発局は掘削をしようとしていません。

1.2 平取ダムで考えられる堆砂

開発局は、検討の場の最終報告書で、平取ダムでは融雪期放流ゲートから土砂が排出されるので、平取ダムではほとんど堆砂が生じないというシミュレーション結果を述べています。これは、再び二風谷ダム堆砂予測の誤りを繰り返すものです。二風谷ダムでは、融雪期放流ゲートに相当するオリフィスゲートが7基もあり、開発局は融雪期にゲートを開けるので堆砂は進行しないと述べていますが、実際には堆砂は進んでいます。平取ダムへの土砂供給は大きいので、上述で紹介した清原らの二風谷ダム解説と同じことが起きて、ダムの河川流入口でデルタが形成され、排砂は困難だと考えられるからです。開発局は堆砂が生じないとするならば、清原らの報文に沿って見解を述べるべきです。平取ダムでも二風谷ダムと同様に堆砂が進行して、堆砂の掘削など膨大な予算が必要となるでしょう。額平川の河川改修によって治水を行うならば、このようなことは生じません。国民の税金に責任がある開発局は、このところをきちんと国民に説明すべきです。

3. 平取ダムではなく河川改修を

「チノミシリを遺すために額平川の治水を河川改修で行ってください」というパブコメに対して開発局は、平取ダムと河道改修費用は約400億円、ダムなしで河道改修費用は約600億円と述べて、コストの少ないダム案を選択したと述べています。パブコメで寄せられた「お金がかかっても治水は他の方法でできるのですから、他の方法で行うべきです」というパブコメ意見は無視されました。堆砂問題の項で述べたように、国交省は（アイヌ）文化を評価することを放棄した結果です。

上述したように、アイヌ文化の保全は重要です。アイヌの大神である幌尻岳を源頭とする額平川流域はとりわけアイヌ文化の上で貴重な流域であり、平取ダム建設に対する地元住民の意見陳述において、日高山脈と額平川周辺は世界遺産に値するという見解が述べられています。ダム建設をしなくても治水は可能なのですから、アイヌ民族の誇りを傷つけるダム建設を中止して、後世に世界遺産に値する文化と景観を遺すべきです。

参考文献 清原正道・太田耕一・田中靖・角哲也：ダム貯水池の計画堆砂容量に関する調査研究、平成23年度 ダム水源地環境技術研究所 所報 - ダム水源地環境整備、16-24.